西本雅実 Aug 18, 2025, 3:25 AM
to Yusuke, Miki, Fumi, NAJC

Japanese
各位

先日の座談会ではお世話になりました。広島の西本雅実です。
拙話は、送信済みの原稿をウェブなりメール通信なりを通じて、ご都合のよい時にご覧いただければ幸いです。
お答えがきちんとできずに終わった、確かバンクーバーの方からのご質問に、この場を借りて、僕の体験と考えをお伝えします。
差し支えなければ「転送」ください。

原爆の惨禍を踏まえて核兵器をめぐる問題をアジアの人々に、わけても韓国をはじめ中国の方々に伝えるという行為は難しさが伴うと受け止めています。
日本の市民グループが「和解」を目指すケースでも、日本の植民地支配・侵略をめぐる「戦争責任」を国として果たしていない史実・今があるからです。
しかも、海外最多の在韓被爆者をはじめ在外被爆者は、日本国内居住者と違って長年、被爆者援護法からも切り捨てられていました。
日本政府は「戦後責任」も放置してきた、と郭貴勲さんの教えや裁判からも僕は思っています。

郭貴勲さん（1924～2023年）は、朝鮮半島の若者にも徴兵制が1944年に適用された1期生として全州師範学校の卒業直前に全く見知らぬ地へ送られ、被爆しました。
https://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=127748&query
この「追悼記」でも記したように、郭さんは日本政府を相手取った裁判を通じて在外被爆者援護への扉をこじ開けました。
日本の「戦争・戦後責任」をも問うた裁判で勝訴という画期的な出来事でしたが、「連合通信」東京発の記事は短く、韓国ではほとんど報じられませんでした。
韓国においては、原爆が日本からの解放（「8月15日」は光復節）をもたらしたと見るのが共通認識であり、同胞の被爆にすら関心は極めて薄いからです。
同時に、「唯一の戦争被爆国」を唱える政府や日本国民の多くも、韓国・朝鮮人がなぜ日本で被爆したのかを見つめる視点に欠けています。
たまたま僕は広島で生まれ育ち、仕事から在韓被爆者をそれなりに長く深く取材し、郭さんの交誼も得て裁判を個人的に支援しましたが、

当地の被爆者団体幹部からは「あんた、ようやるな」と不思議がられました。
残念なことに、メディアにもよく登場する被爆者・証言者は、自身の体験を絶対視するあまり、他者の体験に関心を持っていない人が多い、とも言えます。
ある郡の被爆者組織の新年総会での講演を義理から引き受けた際、日本被団協代表委員が修学旅行生に語る調子で自らの体験をとうとうと話したのにびっくりしたこともあります。
集まっていたのはお年寄りの、親や子、伴侶を失った人たちばかりだったというのに…。

中国へは 2004 年、知己の被爆者や呉空襲体験者、広島出身の東大生、通訳を兼ねてくれた中国モンゴル自治区出身の広島大大学院生と、
被爆地ヒロシマからの対話はどこまで共感を得るのかーとの旅をしたことがあります。
被爆資料を見てもらいたいと東京の大使館に協力を申し入れると、「日本の戦争被害の宣伝」「前例がない」とビザ発給を断わられましたが、
朝日新聞北京特派員から戻った知人の助力から共産党対外連絡部にわたりがつき、「中国人民軍縮協会」が受け入れてくれました。ノービザによる取材でもありました。
まず、指定された北京大で歴史学部の教官や大学院生ら 10 数人との対話に臨みました。

13 歳の夏に学徒動員先で閃光を浴び、今は平和記念公園となった爆心地近くの生家旅館で両親や祖父母、妹も亡くした方が焼け跡から見つけた徳利を手に「8 月 6 日」に起きたことを話しました。
抗日戦争（日中戦争）が専門の教授は日本軍による重慶への無差別爆撃を指摘し、「広島の原爆資料館のような展示で抗日戦争の真相を説明できると思っているのか」と言い、
大学院生は「原爆は日本の侵略戦争を止めた」と舌鋒鋭く、72 歳となっていた被爆者に迫ってきました。
大手新聞社の「北京青年報」を訪ね、2002 年 8 月 6 日付で広島原爆を扱った特集誌面を手にすると、
記事は「あのような悲劇を防ぎ、国の独立と安全を守る至上の宝が核兵器である」と結ばれていました。
ハルビンや南京、上海でも反応はほぼ同じでした。
クリスチャンの立場から「反靖国」や在韓被爆者の支援も続ける呉空襲体験の女性は、「中国政府が言うことを受け入れるのが正しい歴史認識なのか」といらだちも見せました。

対話が成り立たなかった被爆地からの訪問、互いの「溝」の深さを帰国後に連載で報じましたが、読者からの反応は 1 件を除き、なかったと記憶しています。
日中近代関係史を専門とする広島大教授の「反省が足りない者たちが行くからだ」との反応でした。
その教授が何度も足を運んだという「抗日戦争記念館」の最終コーナーに展示されていた原爆きのこ雲のパネル写真は「広島」と説明していましたが、実際は長崎でした。

「終着駅」が全く見えなかった旅で「成果」を記せば、広島大の前身・広島文理科大や高等師範学校で被爆して健在だった男女各 1 人の消息をつかみ、新聞社オーナー夫人の支援から、
南京にいた男性（当時 78 歳）を広島へ付き添いの息子さんと招いたことです。
「被爆者はどこにいても被爆者」と訴えた郭貴勲さんの裁判で上告を断念した日本政府が翌 2003 年から始めた在外被爆者への健康管理手当の支給を申請し、認められました。

そうしたこともあって退職後きままに、「締め切り」がない調査で、
文理科大・高師で被爆した中国人留学生（「満洲国」や汪兆銘政権からの派遣）は 12 人を数えていたことを突き止め、各自の氏名や留学の経緯を日本に住む中国人研究者の協力でつかみました。
広島大の知人に相談すると大学が 2023 年、遺族に代わって申請者となり、名前は広島市の原爆死没者名簿に記入されました。
テレビで見られたことがあると思いますが、平和記念公園内にある原爆慰霊碑の石棺に普段は納められています。
https://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=134947&query

今回の原稿（拙文）でも記していますが、
原爆の悲惨さや核兵器の存在をめぐっては、国家の側に立つのではなく、人間として考えることが最初の一歩だと。
民族的な出自や文化的な背景を乗り越える認識、行動がそこから始まると思っています。
最後に本音を蛇足で述べれば、「反核」を声高に訴えたり、メディアが定型的に扱っているのに応じたりする人たちには既視感を拭えません。
広島に住んでいますが、距離をあえて置いています。

しかし、JNIC の座談会に応じたのも、こうして記したのも、そして参加者のみなさんに敬意を抱くのも、一人の人間として考えてきたことを少しでも伝えたい、つながりたいと思うからです。
長くなり失礼致しました。

西本雅実　拝

2025 年 8 月 17 日(日) 22:53　　Yusuke Tanaka <yusuketanaka446@gmail.com>:

--
西本雅実　拝